

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03021

研究課題名(和文)越境するバスクのトランスナショナル社会空間に関する地理学的研究

研究課題名(英文) A Geographical Study on the Cross-Border Transnational Social Space of the Basque Country

研究代表者

石井 久生 (Ishii, Hisao)

国立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：70272127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヨーロッパのバスク地方とアメリカ合衆国のバスクディアスポラの間のヒトや情報の移動が近年どのように変化したかを明らかにすることで、両地域において近年進行しているバスク人コミュニティの再活性化現象を考察することを目的とした。それを実現するために、両地域において現地調査を実施し、ヒトや情報のモビリティを精査した。地理的に離れた空間で同時に進行する現象を検証するために、トランスナショナル社会空間の概念を適用した。

研究成果の概要(英文)：The object of this study was to clarify recent modification process of human and information mobility between the European Basque Country and Basque diasporas in the United States of America, and to investigate the Basque community revitalization which has been in progress in both areas. To accomplish this goal, a series of field survey was conducted in both areas, and various types of mobility, such as human migration, information movement, funds transfer, etc., were studied. A concept of "transnational social space" was applied in order to examine the phenomenon which are in progress simultaneously in geographically separated spaces.

研究分野：人文地理学

キーワード：文化地理学 バスク地方 バスクディアスポラ モビリティ トランスナショナル社会空間

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成 24～26 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「バスク地方における地名のバスク語化をととした地理学的言語景観研究の構築」では、バスク地方の再領域化を言語景観論的に検証することを試みた。それと並行して研究代表者は、平成 23～26 年度基盤研究(A)(海外学術調査)「世界の博物館アメリカ—移民と基層文化の再検討によるグローバル文化地理学」(研究代表者: 矢ヶ崎典隆)に共同研究者として参加し、アメリカ合衆国に移住したバスク系住民の調査を進めた。アメリカ合衆国での調査で印象的だったのがバスクディアスポラの際立つ存在感であった。そもそもバスク系住民は 19 世紀後半から 1970 年代頃までに主に羊飼いと移住した移民とその子孫である。バスク系住民はアメリカ合衆国西海岸に集中し、その数はわずか 5 万人程度である。それにもかかわらず現在のアメリカ合衆国には 40 以上のバスクセンターが存在し、そこを拠点として、様々な文化活動(バスク語、舞踊、料理などのバスク文化教室など)をはじめ、大規模なバスク祭りが開催されている。こうした現象は、ディアスポラにおいてバスク系住民コミュニティの再ナショナル化が進行していることを示しているといえる。また一部のバスク系住民は牧羊業経営に参入し、現在ではアメリカ西部の牧羊会社経営者の多くをバスク系が占めている。こうした再ナショナル化は、バスク系が集中する限定的地域において顕著であり、領域性・空間性の明瞭な現象でもあり、1980 年代以降という比較的新しい現象である。この時期が、ヨーロッパのバスク地方において 1970 年代後半以降進行した自治権回復とバスク文化の再活性化とほぼ同時期である点も大変興味深い。

ヨーロッパと北アメリカにおいて同時に進行するバスク共同体の再活性化あるいは再領域化を、従来の基盤研究(C)の延長線上に位置づけバスクの再領域化という文脈から検証しようとするならば、2 つの空間の連続性に注目すべきであろう。そしてこれをバスクナショナリズムの言説により意味づけされた連続的なトランスナショナル社会空間として定義しよう。この連続性を検証する指標について検討を重ねた結果、研究代表者が到達したひとつの結論が、社会空間に包摂された多様なネットワーク上を行き交う「移動」すなわち「モビリティ mobility」を指標として採用することである。ここでいうモビリティは、地点間の物理的移動を指すのではなく、政治的、経済的、社会的に生産され特定の言説やコンテキストの中で意味を与えられる移動を指す。意味付けには個人、地域社会をはじめ、バスク州とナバラ州の州政府など制度的主体も関与する。

バスクの故地とディアスポラをめぐるモビリティは、近年大きく変化した。1970 年代まではヒトの移動が中心であった。1980 年代

以降は、ヒトの移動は途絶えたものの情報や価値観のモビリティは活発になっている。こうしたヒト、情報などのモビリティを包摂するトランスナショナル社会空間の言説を解読し、それをもとに空間論的に再領域化・脱領域化について言及することは可能である。このような段階を踏襲してバスク地方とアメリカ合衆国のバスクディアスポラを貫く社会空間が脱領域化と再領域化を経験する過程を検証すれば、従来実践してきた科学研究費補助金の研究成果を発展させつつ、従来にはない地理学的研究を成し遂げることができるのではないかと考えたのが、本研究課題立案のそもそもの背景である。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパのバスク地方とアメリカ合衆国のバスクディアスポラにおいて現地調査を実施し、ヒトや情報のモビリティを精査し、それにより再編成されるバスクの領域性を実証的に解明することを目指した。

3. 研究の方法

第一に、バスクのトランスナショナル社会空間におけるヒトや情報のモビリティを種々のデータから明らかにした。ヒトや物質などの追跡可能な移動は、統計や各種記録から定量的データとしてデータベース化し、地図化した。これにより、ヒトの移動の時代にアメリカ西部に形成されたバスク系住民コミュニティの特殊な一面が明らかになった。ヒトの移動が収束した 1980 年代以降については、情報源を絞りデータを収集することで、ポストモダンなモビリティの一面が明らかになった。こうした情報を、文献調査や聞き取り調査により収集した言説により補強し、バスクのトランスナショナル社会空間の具体像を実証した。

第二に、モビリティとトランスナショナル社会空間の理論的研究を進めた。上記で明らかになったモビリティの事例を、これまでに地理学において蓄積された人口移動研究や移民研究の成果、さらには最新のモビリティ研究やトランスナショナル研究の成果に融合することを試みた。これにより社会空間をトランスナショナルな次元で検証するための地理学的方法論の一定の成果を得ることができた。これは今後も研究を継続研究することで、モビリティ、空間、場所を統合する地理学的理論の体系化に連動することであろう。

4. 研究成果

(1)ヒトの移動の時代に形成された社会空間

アメリカ合衆国西部にバスク人が移住するようになるのは、1849 年のカリフォルニアのゴールドラッシュ以降である。鉱業の衰退以降、バスク人は牧羊業に参入するようになった。その分野で成功した一部のバスク人は、牧羊企業を経営するようになり、羊飼いを故

地のバスク地方から地縁や血縁を頼りに呼び寄せるようになった。英語を話せないバスク人移民は、バスク人が経営する「バスクホテル」を活動拠点とするようになり、そこを中心とする独特のコミュニティを形成した。当時のバスク人コミュニティの景観を、サンボーン地図会社 Sanborn Map Co. が製作した火災保険地図と、各種文献資料から明らかにした。

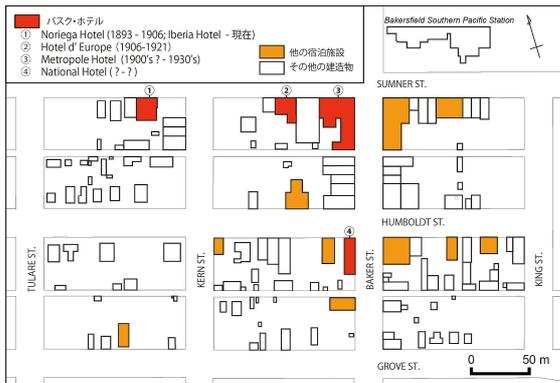


図1 カリフォルニア州ベーカーズフィールドのバスクホテル (1912年)

図1は1912年のカリフォルニア州ベーカーズフィールドにおけるバスクホテルの分布を示している。当時のバスクホテルの立地は、鉄道駅周辺に限定されていたため、サザン・パシフィック鉄道のベーカーズフィールド駅南側の6区画のみを地図化した。

ベーカーズフィールドは羊の出産期にあたる冬季の羊飼いの滞留地となったため、バスク系牧羊企業をはじめ、バスクホテルが多数立地した。バスク系羊飼いの大量移住は19世紀末から20世紀初めにかけて第1のピークを迎えたため、1912年当時のベーカーズフィールドには1893年設立のノリエガ・ホテルをはじめ4つのバスクホテルが立地した。バスク系コミュニティの特徴は、特定の領域に移民街を形成することなく、バスクホテルとそのネットワークでほぼ完結していた点にある。英語のできないバスク系移民は、バスクホテルに身を寄せることで、地元のバスク人ネットワークに組み込まれ、羊飼いやバスク系が占有する業務に参入した。

彼らのコミュニティは、ひとつの都市で完結していたわけではない。バスクホテル経営者らは、地縁や血縁を利用してカリフォルニア中にバスクホテル経営者のネットワークを構築していた (Echeverria 1989)。このネットワークをとおり、宿泊者の調整や就業紹介が行われた。こうしたネットワークを支えるホテル経営者はオテレロ *hotelero* と呼ばれた。こうしたことから、バスク人が生産した当時の社会空間は、都市内で完結する閉鎖的空間ではなく、血縁や地縁のネットワークを経由してカリフォルニア全域に連動する開放系社会空間であったといえる。

同じようにアイダホ州のボイジーにもバスクホテルを拠点とするバスク系コミュニ

ティが形成された。こちらもサンボーン火災保険会社の地図データを利用して、かつての景観が再現可能であるが、さらに当時の住所録を利用して、ホテルに滞在するバスク人の宿泊者数とその属性を解明することができた (図2)



図2 アイダホ州ボイジーのバスクホテルとバスク人宿泊者の職業 (1912年)

アイダホ州の州都ボイジーでは、1893年にオレゴン短線鉄道ボイジー線の旅客駅が開設されたことを契機に、駅の北東部にバスク人が進出するようになった。1912年当時、すでに9軒のバスクホテルが立地した。ここでは、住所録から明らかになったバスク人宿泊者とその職業に注目しよう。住所録から職業の判明するバスク姓の宿泊者は420名であったが、そのうち実に402名の職業が *herder* すなわち羊飼いであった。これは全バスク人宿泊者の約97%に達する値であるが、現実的数値ではない。おそらく、チェックイン時に宿帳に職業を羊飼いと記入し、そのまま羊飼いに従業したり、レストランの給仕や建設労働者などに転職した者もあったことであろう。しかしここで重要なのは、これほどのバスク人が羊飼いやとしてボイジーに到着したという事実である。このように当時のバスク人の職業のステレオタイプは羊飼いだっただのである。

図2中で宿泊者が最も集中するモダン・ルーミングハウス *Modern Rooming House* は、1912年頃にマテオ・アレギ *Mateo Arregui* が開業した。住所録によれば同ホテルに252名に及ぶバスク人が滞在していることになる。当時のアレギは、ボイジーのオテレロの代表的存在であった。おそらくボイジーに到着したバスク人の多くをアレギが引き受け、自らのホテルにチェックインさせた後に、オテレロのネットワークを通じて別のホテルに分散させたため、このような突出した値になったのであろう。

以上のように、20世紀前半にアメリカ西部の各都市にバスク人コミュニティが形成された。それは、バスクホテルを拠点として都市内と外部地域とが連動する独特の社会空間であった。この時期の社会空間は、「移民」というヒトの移動により維持されていた。そ

の移動は、故地バスク地方とアメリカ西部を結ぶトランスナショナルな移動であった。

(2) ヒトの大量移動収束後のポストモダンな移動

前出のボイジーには、世界で唯一のバスク人街である「バスクブロック」が存在する。しかしその形成は比較的新しく、バスク地方からのヒトの移動が収束した 1980 年代以降である。このバスクブロックを舞台に、5 年に一度、世界最大規模のバスクフェスティバルであるハイアルディ Jaialdi が開催される。ハイアルディ 2015 主催者の推計や現地報道によれば、2015 年の祝祭開催期間中の各イベントへの全参加者は約 3 万人であった。そのうちバスク地方からの参加者は、2 千人から 4 千人であった(石井 2016)。数値の幅が大きいものの、約 10 分の 1 はバスク地方からの参加者であったといえる。アメリカ合衆国で開催される他のエスニックな祝祭に故地からどの程度の方が参加するかを証明する具体的資料がみつからないので、10 分の 1 という数字の客観的意義を評価できないが、故地からのこれほどの参加者が集う祝祭がほかにあるだろうか。

ボイジーのケースは、ディアスポラにおけるバスク系住民コミュニティ再活性化の典型例である。近年こうした現象がアメリカ合衆国各地のディアスポラにおいて観察される。それも移民が収束した 1980 年代以降に顕著である。この時期は、故地のバスク州においてバスク語話者集団の再活性化が始まる時期でもあった。ディアスポラと故地という地理的に離れた領域において、ほぼ同時期にバスクコミュニティの活性化が進行したのは偶然ではない。

かつて、ディアスポラの活力はヒトの移動により支えられていた。しかしヒトの移動が収束した 1980 年代以降、移動の主役となるのは情報や資金である。こうした新たな移動主体は、それまでにヒトの移動により確立され強化されたトランスナショナルなネットワークを介して行き来する。そうした移動の中でも、制度的主体が関与するものは追跡が容易である。本研究では、バスク州政府公報などを活用して、バスク州政府によるディアスポラ政策にともなう資金の移動の実態を明らかにした。

バスクセンターは 19 世紀中ごろに登場したバスク人の同胞組織である。バスク州政府が成立した 1980 年頃までに、バスクセンターはディアスポラ各地に登場した。バスク州政府は国家ではないため、ディアスポラ政策や対外同胞支援の窓口として既存のバスクセンター網を積極的に活用した。2017 年 9 月現在、191 のバスクセンターがバスク州政府の公認を得ている。その分布には偏りがみられる(図 3)。当然のことながら、多くのバスク人が移住した南北アメリカ大陸に多い。特に集中するのがアルゼンチンとウルグアイ

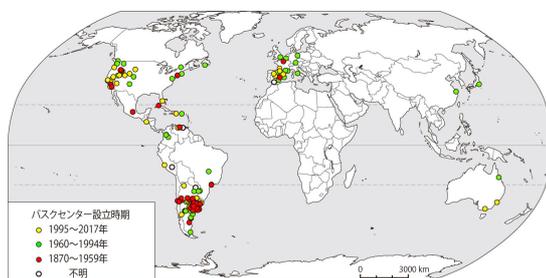


図 3 バスクセンターの分布と設立年

のラプラタ川流域周辺地域である。ここは 18 ~ 19 世紀に大量のバスク人が移住し、最も古いモンテビデオの Laurac Bat は 1876 年設立である。実際にこの付近には、1960 年以前に設立された古い同胞組織が存続している。しかし同時に、1995 年以降設立の新しい組織も多い。アメリカ合衆国西部は、新大陸におけるバスク人のもうひとつの集住地域であるが、1960 年以前に設立された古いバスクセンターは少ない。これは、ラプラタ地域と比較してこの地域のディアスポラ形成が遅れて進行し、移住のピークが 20 世紀中頃にあったためである。前出のベーカーズフィールドやボイジーのバスクセンターは設立が古く、ともに 1940 年代である。それと同時に 1995 年以降設立の新しいバスクセンターも目立つ。

バスク州政府によるバスクセンターへの補助金事業が開始されたのは 1988 年であった。その当時の補助金の目的は、バスク文化の普及支援にあった。しかし 1994 年に州法 8/1994 号が成立したことで性格が大きく変わった。同法 1 条に掲げられた目的に、「バスク州、バスク社会、そしてその組織と、域外に存在するバスクコミュニティおよびバスクセンターとの関係の強化、支援の推進」とあるように、これ以降はディアスポラ支援のための補助金制度へと大きく転換した。

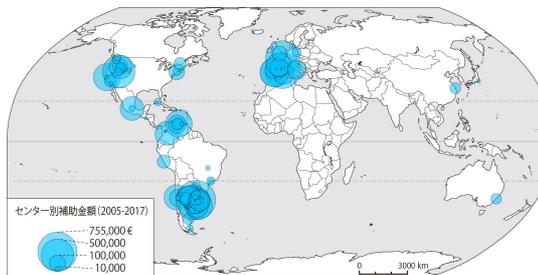


図 4 バスク州政府からバスクセンターへの補助金額 (2005-2017 年)

2005 年から 2017 年現在までに移動した補助金は約 1330 万ユーロに達する(図 4)。南北アメリカのバスクディアスポラが補助金の主たる移動先になっている。こうした資金移動が、ディアスポラのバスク系住民コミュニティ再活性化のひとつの原動力であるといえよう。しかし 2005 年以前と比較して、ヨーロッパ各地のバスクセンターへの補助

金移動が増加しており、特にブリュッセルが顕著である。ヨーロッパ内のバスクセンターへの補助金の増加は、EU 政策重視政策や、アムステルダム条約による EU 内移動の自由化の影響だけとはいえない。さらにバスクディアスポラとはいえないアジアの上海や東京も補助金移動先に浮上している。こうした移動は、同朋コミュニティ連帯の強化を目的のひとつとした従来のディアスポラ政策の文脈から明らかに外れる。

こうした変化の要因としてまずひとついえることは、バスク州政府のバスクディアスポラやバスクコミュニティに対する認識が外に開かれたものに変化してきたということである。州法 8/1994 号の 3 条はバスクコミュニティを構成する人々を、3 つの指標で定義している。そのうち 2 つ「域外に住むバスク人とその子孫」「バスクで生まれスペイン市民戦争の結果非難し域外に住む者」は、旧来のディアスポラの概念に当てはまるが、もうひとつ「公認されたバスクセンターの構成員」という定義が意味するところは広い。ここでいう構成員は、バスク語の *bazkidek*、スペイン語の *socios* が用いられていることから、参加離脱が容易な自由意思に基づく構成員を意味する。同法で他に同じ用語が出てくるのが、5 条 2 項のバスクセンター公認のための 3 つの条件である。そのひとつとして、「第一義的な合法的目的と、バスク地方、その住民、歴史、言語、文化との文化的社会的経済的絆の維持に参与する構成員 *bazkidek/socios* が表明する意思を包摂すること」とある。それからすれば、絆の維持に直接かかわるディアスポラの住民は当然対象になるが、バスクの文化や社会に関心と理解を示す者も包摂されることになる。ブリュッセル、ベルリン、ローマなどのヨーロッパの大都市、さらには東京に在住するバスクにまなざしを注ぐ人々が、こうしてバスクセンターの枠組みに取り込まれていった結果が、図 4 に示した補助金移動先の多様化に反映されているといえる。

(3) 考察：トランスナショナル社会空間のポストモダニズム

補助金の移動は、当初は大量移民の時代に移民らが生産したトランスナショナル社会空間に張り巡らされたネットワークに依存していた。しかし、バスクコミュニティがディアスポラに限定されず、バスクに関心を寄せる主体にまで拡張されるにしたがい、移動の実践を包摂する社会空間も変質していったといえる。こうした変化の背景には、バスク州政府やバスク市民が民主的で平和的な社会の実現に対して抱く強い信念があるといえる。バスク州政府は、その発足当初から平和的なイメージの醸成に積極的であった。スペイン国内に向けてこのようなメッセージを発信することは特に重要であった。スペイン中央政府との間には歴史的に様々な問

題が介在し、特に近年はテロの問題解決が懸案であった。こうした問題を複雑化させないためにも、平和的メッセージの発信はバスクの政府や市民にとって重要課題であった。それと同時に、対 EU のような国際政治の場での発言権を強め、グローバル経済において優位な投資環境を確立するためにも、平和的イメージの構築は重要であった。バスク州政府が成立以降ことある度に主張してきたのは、ディアスポラは故地の政治問題を負担する義務を負うのであるから、バスクの肯定的イメージのメッセンジャーとして活躍すべきだという論理である (Oiarzabal 2007)。州政府はバスクディアスポラとバスクセンターに対して、故地の平和的・肯定的イメージを広めるための大使としての役割を期待している。特にバスクセンターについては、1920 年代からスペイン市民戦争のあった 1930 年代にかけて、移住したバスク地方のナショナリスト勢力がその活動拠点として利用した歴史がある (Tápiz Fernandez 2002)。こうしたバスクセンターにつきまとう負のイメージを払拭し、バスクコミュニティの肯定的イメージを広めることは、故地とディアスポラの共通利害でもある。以上のような文脈から、「世界に開かれたバスク」という論理が成り立つのであり、それに取り込まれるバスクディアスポラも必然的に開放性を高める必要があった。前述のバスクセンターをめぐる資金移動の変化は、こうした開放的性格の強化されたバスクディアスポラの登場と、それと連動するバスクセンターの開放性の高まりによって生じたのである。

ヒトの移動の時代に、それに関与する諸アクタの多様な行為により生産されたトランスナショナル社会空間は、このように開放性を増幅したバスクの故地とディアスポラを包摂してきたといえる。そもそもバスク地方とそのディアスポラは、領域性のはっきりした独立した空間の存在を前提としているが、その一方で、平和的・開放的イメージを増幅しつつ、バスク固有の文化に敬意を抱く世界各地の他者の思慮深いまなざしが注がれる「場所 *place*」としての特徴を帯びている。多様な主体の想像により生産される場所は、主体の行為により生産される社会空間に容易に包摂されうる。バスクセンターをめぐる資金の移動は、新たに参加するようになった主体（このケースでは州政府や各地のバスクセンター）を従来の移動ネットワークに取り込むことで、トランスナショナル社会空間に包摂してきたといえる。そしてもうひとついえることは、こうした一連の動きに対応して、トランスナショナル社会空間の開放性も高まりつつあるということである。Oiarzabal (2007) や Totoricaüena (2004, 2005) も指摘するように、バスクナショナリズムの方向性は故地においてさえも一枚岩ではなく多様であり、ディアスポラにおいても同様である。今回の研究で明らかになったバスクのト

ランスナショナルな社会空間は、こうした多様な志向を取り込みつつ、大きな、しかし穏やかな潮流を育む懐の深いゆりかごのような存在であった。

<引用文献>

- (1) 石井久生 2014. 「アイダホ州ボーイジーにおけるハリアルディ 2015 にみるバスク祝祭空間のトランスナショナルリティ」『共立国際研究』31: 17-33.
- (2) Echeverria, Jeronima, 1989. "California's Basque Hotel and Their Hoteleros," In William A. Douglass (ed.) *Essays in Basque Social Anthropology and History*. University of Nevada Press, pp. 297-316.
- (3) Oiarzabal, P. J. 2007. "'We Love You': the Basque Government's Post-Franco Discourses on the Basque Diaspora," *Sancho el Sabio* 26: 95-131.
- (4) Tápiz Fernandez, J. 2002, "La actividad política de los emigrantes, el caso vasco (1903-1936)," In Ó. Álvarez Gila and A. Morales (eds.) *Las migraciones vascas en perspectiva histórica (siglos. XVI-XX)*. UPV/EHU.
- (5) Totoricagüena, G. 2004. *Identity, Culture and Politics in the Basque Diaspora*. University of Nevada Press.
- (6) Totoricagüena, G. 2005. *Basque Diaspora: Migration and Transnational Identity*. Center for Basque Studies, University of Nevada.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) 石井久生 2018. バスク地方とバスク・ディアスポラをめぐるモビリティの特徴とその変容. 共立国際研究, 査読無, No. 35. pp. 39-62.
<http://id.nii.ac.jp/1087/00003212/>
- (2) 石井久生 2016. アイダホ州ボーイジーにおけるハリアルディ 2015 にみるバスク祝祭空間のトランスナショナルリティ. 共立国際研究, 査読無, No. 33, pp. 17-33.
<http://id.nii.ac.jp/1087/00003107/>

〔学会発表〕(計1件)

- (1) 石井久生, バスク人が生産する祝祭空間のトランスナショナルティ—アメリカ西部アイダホ州ボーイジーのハリアルディの事例, 日本地理学会 2015 年秋季学術大会, 愛媛大学, 2015 年 9 月 19 日.

〔図書〕(計2件)

- (1) 石井久生・浦部浩之編 2018. 『中部アメリカ』世界地誌シリーズ 10, 朝倉書店.
- (2) 矢ヶ崎典隆編 2018. 『移民社会アメリ

カの記憶と継承—移民博物館で読み解く世界の博物館ア』学文社(石井久生, 8 章「アメリカ西部のバスク人とアイダホ州ボーイジーのバスク博物館」 pp. 186-210 を担当).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 久生 (ISHII HISAO)
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号: 70272127

(2) 研究協力者

Millar, Patty
ボーイジー・バスク博物館文化センター・所長

Skivington, Gretchen
グレートベイスン大学エルコ校・教授

Mujika Ulazia, Nerea
デウスト大学バスク研究所・所長

Arburua Goyeneche, Rosa M^a
バスク大学教育学部サンセバスティアン校・教授